



物語文 海のいのち ②

名前

月 日

次の文章を読み、あとの問いに答えましょう。

でしになって何年もたったある朝、いつものように同じ瀬に漁に出た太一たいいちに向かって、与吉よきちいさはふつと声をもらした。そのころには与吉いさは船に乗ってこそきたが、作業はほとんど太一がやるようになっていた。

「自分では気づかないだろうが、おまえは村一番の漁師だよ。太一、ここはおまえの海だ。」

船に乗らなくなった与吉いさの家に、太一は漁から帰ると毎日魚を届けとどけに行った。真夏のある日、与吉いさは暑いのに毛布をのどまでかけてねむっていた。太一は全てをさとした。

「海に帰りましたか。与吉いさ、心から感謝しております。おかげさまでぼくも海で生きられます。」

悲しみ③がふき上がってきたが、今の太一は自然な気持ちで顔の前に両手を合わせる事ができた。父がそうであったように、与吉いさも海に帰っていったのだ。

ある日、母はこんなふう④に言うのだった。「おまえが、おとうの死んだ瀬にもぐると、いつ言いだすかと思うと、わたしは夜もねむれないよ。おまえの心の中が見えるように。」

太一は、あらしさえもはね返すくつ強わかな若者ものになっていたのだ。太一は、そのたくましい背せなか中に、母の悲しみさえも背負おうとしていたのである。

(立松 和平 『新しい国語』六 東京書籍)

(1) だれが、だれのでしなのですか。

だれが () が () だれの () のでし

(2) ふつと声をもらしたの様子にあたるものに○をつけましょう。

() 特に言おうという気持ちではないが、つい大きな声が出た。

() ぜひ言おうという気持ちで、小さい声で伝えた。

() 特に言おうという気持ちではないが、自然と声が出た。

(3) ③は、どんなことを表していますか。

(4) ④が表していることを言いかえている表現を文中から八字で書きぬきましょう。

与吉いさも

た

(5) 悲⑤しみがふき上がってきたの意味にあたるものに○をつけましょう。

() 悲しみがふきとんだ。

() 悲しみの気持ちが激はげしくわいてきた。

() 悲しみの気持ちが少しずつわいてきた。

(6) ⑤にあてはまる言葉を選び、○をつけましょう。

() おそろしくて

() わくわくして

() たくましくて

フアイト！

